

<レポート>

R. H. トーニーの『獲得社会』と『平等論』  
——イギリス成人教育の指導者の社会主義思想——



NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員 香川重遠

1. はじめに

R. H. トーニー (Richard Henry Tawney, 1880-1962) は、WEA (Workers' Educational Association) の指導者として 20 世紀のイギリス成人教育の発展に多大な影響力を及ぼした人物である。宮坂は『英国成人教育史の研究 II』において、イギリス成人教育史におけるもっとも創造的かつ影響力の大きかった巨人として、大学拡張運動の創設者 J. ステュアート (James Stuart, 1843-1913) と WEA の創設者 A. マンスブリッジ (Albert Mansbridge, 1876-1952)、そして、トーニーの 3 人の名をあげているが、こうした選択は「英国成人教育史の研究者の大方が同意しうる客観的評価であろう」と述べている<sup>1</sup>。

トーニーはオックスフォード大学ベリオール・カレッジを卒業した後、イギリス初の大学拡張としてのセツルメントであるトインビー・ホールに進んだ。ライトは、ベリオール・カレッジ時代のトーニーは学寮長 E. ケアードらの理想主義と同時に、「後のバーミンガム主教となった C. ゴアの社会的福音思想の影響を多大に受けていた」といい<sup>2</sup>、トインビー・ホール時代においては、「貧困と社会的困窮だけでなく、イースト・エンドの労働者階級の連帯や『ヒューマニティ (humanity)』(当時のトーニーの言葉)を経験する、直接的な接触があった」と説明している<sup>3</sup>。1906 年に、トーニーはトインビー・ホールを去り、WEA での活動に専念するが、第一次大戦時にはマンチェスター連隊に志願兵として入隊もしている。この経験はトーニーに社会主義への傾倒をより確固とさせた。テリルは、「トーニーは戦時中に、戦後のあり方について第一次大戦から学んだ。WEA や労働党における言論や

<sup>1</sup> 宮坂広作『英国成人教育史の研究 II』明石書店、1996 年、60 頁。

<sup>2</sup> Wright, A., *R. H. Tawney*, Manchester University Press, Manchester, 1987, p.2. トーニーは 1921 年の『宗教と資本主義の勃興』の巻頭において「チャールズ・ゴア博士に 愛情と感謝をこめて」と記している。出口勇藏・越智武臣訳『宗教と資本主義の勃興——歴史的研究(上)』岩波書店、1956 年。

<sup>3</sup> *Ibid.*, p.4.

論文において、彼は戦争に付随した社会主義に関連する再建について語っていた」と述べている<sup>4</sup>。

ウィンターとジョスリンは、20 世紀初頭の社会主義者の間には、「労働者運動は活動不全状態であり、一貫した政治哲学という焦点と指導力が欠けている限りは依然としてそのままでありつづけるであろうし、その政治哲学を創造することは時代の主要な知的課題である」という信念を共有していたといい<sup>5</sup>、トーニーについて、「彼の生涯にわたる教育に捧げた献身ぶりは、少なくともこの問題への個人的な応答であるといえよう」と述べている<sup>6</sup>。本稿では、トーニーの社会主義思想を、1921 年の『獲得社会』(*The Aquisitive Society*) と 1931 年初版の『平等論』(*Equality*) という戦間期に発表された学術書を中心に取りあげ、トーニーの成人教育運動の実践に含まれていた社会主義思想を俯瞰し、その核心部分を探ることを目的とする。

## 2. 『獲得社会』にみる社会主義思想

トーニーは第一次大戦後の 1921 年に『獲得社会』を発表した。テリルは、「獲得社会は〔当時のマルクス主義的〕社会主義のアンチテーゼだけでなく、それはまた平和についても扱っていた」と指摘しているが<sup>7</sup>、『獲得社会』は戦時中の従軍経験に萌芽したトーニーの社会主義と平和への希求の思想の現れであった。

トーニーは『獲得社会』の冒頭において、理想とすべき社会像として「機能社会」(functional society) を提唱している。トーニーは「機能」という概念を、「社会的な目的の理念を具現化し、かつ表現する活動として定義できよう」と定義し、この「機能」概念を鍵として主張を展開している<sup>8</sup>。トーニーは「機能社会」について、「富の獲得を社会的な義務の遂行の条件とすることを目的とし、報酬を奉仕 (service) に比例することを求め、奉仕をしない人々への報酬を否定し、人間が所有するものではなく、彼らが創造した達

---

<sup>4</sup> Terrill, R., *R. H. Tawney and His Times : Socialism as Fellowship*, Harvard University press, Cambridge, 1973, p. 95.

<sup>5</sup> Winter, J. M. and Joslin, D. M., *R. H. Tawney's Commonplace Book*, Cambridge University Press, Cambridge, 1972, p. xix.

<sup>6</sup> *Ditto*. テリルは、「トーニーは教育の理論家ではなく思想家であった」と分析し、トーニーの、「教育に関する著書は、いくつかの例外を除いては、失礼であるが私の読むことができないような類である」という言葉を引用している。Terrill, R., *Ibid.*, p. 182., qtd., in Tawney, R. H., *The Radical Tradition : Twelve Essays on Politics, Education and Literature*, George Allen and Unwin, London, 1964, pp. 100-1.

<sup>7</sup> Terrill, R., *Ibid.*, p.149.

<sup>8</sup> Tawney, R. H., *The Aquisitive Society*, Wheatsheaf Books Limited, Sussex, 1982, p.15.

成するものを第一に要求するような社会」と定義している<sup>9</sup>。

一方で、トーニーはこれまでの資本主義社会を「獲得社会」と呼称し、「もし、彼らが社会組織の目的や基準を問われるならば、最大多数の最大幸福の公式を想起させるような回答をあたえるであろう。.....このような社会のすべての傾向と利益と先入観は富の獲得を促進する」と定義している<sup>10</sup>。トーニーは獲得社会について、「このような理念の衝動のもとにおいては、人々は宗教的にも、賢明にも、芸術的にもならない。宗教や賢明さや芸術は制限を受容することを意味している」とヒューマニズムの観点から明白に否定し<sup>11</sup>、『機能社会』が、もっとも貧しく勤勉な職人の人間においても、創造の技術に名誉を与えるのに反して、『獲得社会』は富の所有を崇敬するのである」と主張している<sup>12</sup>。

つづけて、トーニーは、「社会は機能を基礎として組織されなければならないという原理の適用は難しいことではなく、簡単に直接的なことである」といい<sup>13</sup>、そのためには、「私有財産の正統型とそうでない型とを区分する基準を提供する」ことが必要であると主張し<sup>14</sup>、以下のように所有権を分類している。①個人的奉仕への報酬としての財産、②健康と快適さに必要な個人的所有物の財産、③所有者によって使用される土地と道具の財産、④著作者や発明者によって所有される著作権と特許権という財産、⑤多くの農業地代を含む純粋な利子の財産、⑥「準地代」としての幸運や大きな成功による利潤の財産、⑦独占利潤の財産、⑧都市の地代の財産、⑨使用量の財産、である<sup>15</sup>。

そして、トーニーは、「このうち最初の4つの種類の財産権は労働の遂行に伴うものであり、ある意味においてはその条件である。最後の4つは明らかにそうではない」として<sup>16</sup>、「財産制度の意味は、労働者が自身の労働の生産物を受け取ることを意味することによって、勤勉を鼓舞することであるといわれている。しかし、それならば、人間が彼自身の労働によって所有している財産を維持することが重要であるのと正比例して、彼が誰か他人の労働によって所有している財産をなくすことも重要なのである」と指摘している<sup>17</sup>。

こうした主張にくわえて、トーニーはそれまでの社会主義者がしばしば主張してきた「産

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 31.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 32.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 33.

<sup>12</sup> *Ibid.*, pp. 36-7.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 49.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 49.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 58.

<sup>16</sup> *Ibid.*, pp. 58-9.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 69.

業の国有化」についても、「産業の原理を腐敗させるのは、私的所有ではなく、労働から切り離された私的所有であり、土地または資本の私有財産は必ず有害であるという社会主義者たちの理念は、.... スコラの学術である」と批判的な姿勢を示し<sup>18</sup>、「所有権を廃止するただひとつの方法としてしばしば主張されている『国有化』は単に重要な種類 (*genus*) のひとつにすぎない。それはひとつの目的の手段であって、自己目的ではない」と<sup>19</sup>、産業国有化計画を絶対視しない主張をしていた。

終章においてトーニーはこれまで論じてきた「機能社会」の政治哲学について、「社会は経済的機構ではなく、しばしば不調和なことがあるが、共同目的 (*common ends*) への献身によって鼓舞されることのできる意思のコミュニティである」ということを意味しているといい<sup>20</sup>、「したがって、それは宗教的なものであり、それが真実であるならば、それを伝播するのにふさわしい団体はキリスト教教会である」とキリスト教教会を「機能社会」の中心に位置づけている<sup>21</sup>。そして、トーニーはその理由について、「なぜならば、キリスト教教会はその両者を非難する基準——人間がつくったのではなく、彼らの便宜や欲望から独立した基準——を維持しているからである」と主張している<sup>22</sup>。

以上が、トーニーの『獲得社会』において展開された社会主義思想の概要であった。関は『獲得社会』を評し、「トーニーは少しも個人主義を否定しない。むしろかれの真意は、個人主義の墮落した形である経済的自由放任主義を否定し、人格の完成に奉仕しうるとき共同連帯の社会の建設を主張するのである。社会主義は、倫理的意味の個人主義と矛盾するものではない」と述べている<sup>23</sup>。

トーニーは『獲得社会』において、キリスト教的倫理に基づいた「機能」概念を鍵とし、「獲得社会」から「機能社会」へという転換の論理的な道筋を根拠づけていた。ライトはトーニーは「機能」概念を、「共同道徳の目的に基づいた社会的統一と、J. ラスキンの『命に富が存在する』と表現した類の産業資本主義への社会的かつ文化的な批判の伝統としての中世的な概念として用い、彼は機能概念を、社会の共同目的として、社会的な決意を吹

---

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 82.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 97.

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 180. *common* という概念を本稿では「共同」と訳している。イギリスの社会思想では *common* という形容詞が名詞の前に付加されることが多く (とくに 19 世紀末から 20 世紀初頭の理想主義者の間には顕著である。たとえば、中心人物であったベリオール・カレッジの T. H. グリーンの *common good* 概念が筆頭である)、トーニーも多用している。そうした傾向は、*commonwealth* や *common law*、*common sense* など現実的にも顕著である。

<sup>21</sup> *Ditto*.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 185.

<sup>23</sup> 関 嘉彦「概説」桑原武夫他『イギリスの社会主義思想』河出書房新社、1963 年、10 頁。

き込んだ社会の特徴的概念として主張していた」と説明している<sup>24</sup>。

デニスとハルゼーが、「社会秩序についてのトーニーのコンセプトは、新約聖書の道徳性に発していた。彼は資本主義を単にキリスト教的でないと考えただけでなく、経済的目的を最優先事項に変更することで反キリスト教的とみなしていた」と説明しているように<sup>25</sup>、『獲得社会』にはキリスト教的倫理の色彩が強く反映されており、そこには国家による制度的な社会主義の構築よりも、キリスト教的倫理の社会化の実現とヒューマンイズムの視点が明確にあった。

### 3. 『平等論』にみる社会主義思想

トーニーの『平等論』の初版はロンドン経済政治学院 (LSE) の経済史教授に就任した 1931 年に発表された。その後、1951 年には「序文」と「結び」の章をくわえた第三版が、1952 年には第四版が出版された。

トーニーは『平等論』の冒頭において M. アーノルドの「不平等という宗教」の思想への同意を強調し、「アーノルドは、不平等を信仰する態度は文明社会の印である人間としてのヒューマンティの精神や人間の尊厳の感覚とは両立しない、とっている」といい<sup>26</sup>、アーノルドの「事実、不平等は一方では人間を増長させ、他方では人間を卑屈にして意気消沈させることから、社会を害する。不平等に基づく体制は自然に反しており、結局は崩壊するのである」という記述を引用している<sup>27</sup>。ここでトーニーはアーノルドが不平等と形容したものを具体的に、「異なる階級間の環境と機会の明確な相違」として表現している<sup>28</sup>。

こうした状況を打破する動きとして、トーニーは労働者階級運動について取り上げ、「労働者階級運動が支持しているものは、明らかに、富の獲得を通じた個人的出世の過度な強調に対する強制としての社会正義と連帯という理想である」と指摘し<sup>29</sup>、「それは金銭と権力が人間の目的に役立つものではなくなったときに、人間により高い価値を置き、それらにより低い価値を置く社会の可能性を信じることである」と述べている<sup>30</sup>。トーニーは階級

---

<sup>24</sup> Wright, A., *op.cit.*, p.59.

<sup>25</sup> Dennis, N. and Halsey, A. H., *English Ethical Socialism : From More to R. H. Tawney*, Clarendon Press, Oxford, p.151 .

<sup>26</sup> Tawney, R. H., *Equality : With An Introduction Richard M. Titmuss*, George Allen and Unwin, London, 1964, p.33.

<sup>27</sup> *Ditto.*, qtd., in M. Arnold, Lecture on 'Equality', in *Mixed Essays*, ed. 1903, p. ix.

<sup>28</sup> *Ditto.*

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 40.

<sup>30</sup> *Ditto.*

間の相違の統合のためにはコミュニティにおける共同教養 (common culture) の構築が必要であるといい、そのための条件として、「かなりの経済的平等など——それは必ずしも金銭的な所得の同水準だけではなく、環境の平等、教育と文明の手段に接近する機会の平等、保障と独立の平等、および通常これらの平等が自ずともたらす社会的考慮の平等を意味する——を必要とする」と主張している<sup>31</sup>。

さらに、トーニーは「平等」という概念が論者によって多様に用いられていることを述べたうえで、アーノルドや J. S. ミルらのヴィクトリア朝の思想家の主張に同意を示し、彼らの主張を以下のようにまとめている。

人間の性格や能力は多様であるにもかかわらず、人間は共同ヒューマニティとして教養をつける (cultivating) に値する資質をもっており、コミュニティはそれを考慮に入れて経済組織や社会制度を計画すれば、すなわち、富や生まれや社会的地位の相違を軽視し、共同ニーズを充足し、共同啓蒙 (common enlightenment) と共同愉悅 (common enjoyment) の源泉となるような制度を確固とした基礎の上に確立すれば、コミュニティはそのような特質をもっとも発揮することができる、という事実である<sup>32</sup>。

トーニーの個人の相違を尊重する「平等」概念の基盤には「ヒューマニズム」(humanism) の概念があった。トーニーは、「ヒューマニズムには多くの意味がある。それは、人間性には多くの側面があるからであり、それをひとつのセクトのレッテルとして専用するのは適切ではない」と前置きし<sup>33</sup>、ヒューマニズムとは、「生活の機構——財産、物質的手段、産業の組織、そして社会制度のすべての構造と機構——はひとつの目的のための手段とみなされるべきであり、そして、その目的とは個々の人間の完成に向かった成長である」と定義している<sup>34</sup>。

トーニーはこれらをまとめる形で、「政治的領域から経済的領域への自由の拡大が産業社会のもっとも緊急な課題のひとつである、ということは明らかである。しかし、この拡大がなされている限り、伝統的な自由と平等との対立はもはや妥当とはいえない、ということも明らかである」といい<sup>35</sup>、その意味について、「自由が実現的に解釈され、単に最小限の市民的及び政治的権利のみではなく、経済的弱者が経済的強者のなすがままにならず、そして、すべての人に影響をあたえる経済活動の側面は最終的にはすべての人の意志にし

---

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 43.

<sup>32</sup> *Ibid.*, pp. 55-6.

<sup>33</sup> *Ibid.*, p. 84.

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 85.

<sup>35</sup> *Ibid.*, pp. 167-8.

たがって統制されるという保障」になると主張している<sup>36</sup>。

最後に、「結び」においてトーニーはこれまでの「平等」への思想を締括し、「性質や知識や資源によって加えられる制限の範囲内で、社会の全成員が、社会の制度や政策によって、彼らの能力を十分に伸ばし、彼らの判断に従って彼らの義務を果たし、そして——自由はあまり堅いものであってはならないので——何かをしたい時には好きなようにすることができる限り、いや、その限りにおいてのみ、社会は自由である」といい<sup>37</sup>、「それゆえに、そのような機会をより多くの人に分け与えようとする活動は二重に祝福される。それは不平等を減少させるだけでなく、自由も増大させている」と主張していた<sup>38</sup>。こうした主張は、トーニーの労働党の政策や綱領の立案や教育政策への貢献、そして WEA での労働者教育運動の指導者としての実践の信条でもあった。

ライトは『平等論』においてトーニーが示した事項について、「社会に、物質的な環境だけでなく、教育、健康、自由、選択、教養、そして、人生自体でさえ階級的な規模の不平等が存在していることが計測されていた」と述べ<sup>39</sup>、トーニーの問題視した不平等が経済の領域を超えたものであったことを述べているが、そこには共同教養とヒューマニズムに基づく社会と人間の多様性の尊重が含まれていた。また、ライトは、「それゆえに、一方で、トーニーは社会的かつ経済的な意味合いを含んだ人間の価値の平等の原理のあり方を示そうとしていたが、それは、肉体的および精神的な、『文明の手段』への接近は平等であるべきだということを意味していた」と指摘している<sup>40</sup>。

テリルは、「『平等論』は社会主義者が固執すべき政策の原理を提供した。トーニーは、福祉国家の増大は、社会主義共和国にとって不可欠であると考えていた」といい<sup>41</sup>、『平等論』は第二次大戦前によく購入されたが、その意味するもののほとんどは、左派が民主主義の方式を再受容した時期である、戦後の再建についてであった。そして、トーニーは、1952 年の第四版では、アトリー政権がイギリスをより平等な社会にしたことを認めていた」と述べている<sup>42</sup>。R. ピンカーは『平等論』を評して、「今日の英国の社会主義思想と集合主義思想に大きな影響を与えて続けている本書は、相変わらず、社会民主主義の特質と、再分配や構造変革の動因となる公的な諸社会サービスの役割に関する全ての議論の原点とな

---

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 168.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 235.

<sup>38</sup> *Ditto*.

<sup>39</sup> Wright, A., *op.cit.*, p. 42.

<sup>40</sup> *Ditto*.

<sup>41</sup> Terrill, R., *op.cit.*, p. 73.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 75.

る文献である」と指摘しているが<sup>43</sup>、こうしたトーニーの『平等論』における社会主義思想をバックボーンにして戦後の福祉国家の政策立案に多大な貢献をしたのが、1964 年の第四版のペーパーバック版に「はしがき」を寄せた LSE の社会政策学者 R. M. ティトマスであった。

#### 4. トーニーの社会主義思想の特色

1952 年の「イギリス社会主義の現状」において、トーニーはイギリス社会主義の遺産について、「まず第一に、一般の民衆に関する限り、運動の背後にあった衝動は、頑固でまた厚かましいくらい、倫理的なもの (ethical) であった」と述べ<sup>44</sup>、「私の考えでは、社会主義の基礎は、ある種の生活や社会は人間にふさわしく、他のものはそうでないと決定することにある」と説明している<sup>45</sup>。

トーニーがそうした判断の基準がキリスト教の教義にあると考えていたことは『獲得社会』に顕著に示されていた。ライトは『獲得社会』と『平等論』におけるトーニーの社会主義のアプローチについて、「一方で、トーニーは社会主義者をキリスト教徒に変える業務に取り組み (社会主義者をキリスト教徒に変えることを賢明に好んでいた)、他方で、トーニーの目的は、社会問題が基本的に道徳問題であり、その解決が『[キリスト教の] 原理』の領域に見つけられることを、非キリスト教徒に説き明かすことにあった」といい<sup>46</sup>、トーニーの活動とキリスト教への信仰の関連についても、「トーニーは、WEA や労働党、教会といった活動に従事したすべての領域において、厳格な思想や活発な行動とは代わって、偽善的な決まり文句への厳しい批判者であった」と述べている<sup>47</sup>。また、テリルはトーニーの WEA での成人教育運動の実践には、「資本主義の神話によって催眠をかけられた労働者階級の覚醒を可能とした告知や奨励する力があった」と指摘している<sup>48</sup>。

デニスとハルゼーは、『イギリス倫理的社会主義』(*English Ethical Socialism*) において、「私たち自身は、イギリス急進主義の伝統の継承が倫理的社会主義であるとみなしている」といい<sup>49</sup>、トーニーを倫理的社会主義者の「偉大な現代の巨匠」として位置づけ、「トーニーは私たちが理解に務めたその伝統についてもっとも完璧な表現を提起した。彼において

<sup>43</sup> Pinker, R. 「R.H. トーニーの経歴」岡田藤太郎・木下健司訳『平等論』相川書房、1993 年、323 頁。

<sup>44</sup> Tawney, R. H., *The Radical Tradition*, p. 168.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 170.

<sup>46</sup> Wright, A., *op.cit.*, p. 33.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 55.

<sup>48</sup> Terrill, R., *op.cit.*, p. 182.

<sup>49</sup> Dennis, N. and Halsey, A. H., *op.cit.*, p. vi.



その伝統は個人的達成の最高次元の段階に到達し、その議論の範囲を包括的に広げた」と主張している<sup>50</sup>。デニスとハルゼーは、WEA における労働者教育運動についても倫理的社会主義者運動の事例として取り上げ、「A. マンスブリッジ、W. テンプル、そしてトーニー (1928-1945 年の間は会長であった) は、民主主義の深化のために高度な教養が必要であるという信条に尽力した」といい<sup>51</sup>、「彼らは、そのような運動は、シティズンシップの広範な平等の保証を提供すると信じていた」と述べている<sup>52</sup>。

また、「イギリス社会主義の現状」においてトーニーは、マルクス主義についても言及し、「私は、進歩の必然性についてのマルクスの中期ヴィクトリア朝的な信念を共有していない」といい<sup>53</sup>、「正直さから慈悲に至るまでの平凡な人間の美德をブルジョア的道德と片づけてしまい、倫理的基準を誤らせ、国境地帯で起こった出来事を、一面ではファシストの残忍さと非難しつつ、別の面ではプロレタリア的英雄主義の勝利として賛美するような詭弁は、遠慮していえば相対主義であるが、私にとっては吐き気を催すものである」と厳しく批判していた<sup>54</sup>。こうしたトーニーのマルクス主義への批判は、『平等論』においても散見されていた。たとえば、トーニーは「ヒューマニズム」について、「唯物主義のアンチテーゼ」として用いていると主張していた<sup>55</sup>。

トーニーの社会主義思想の特色は、キリスト教的倫理の強調とマルクス主義の否定という点にあった。トーニーのキリスト教的倫理に基づく社会主義思想は、国家の制度ではなく、人間や社会の理念の変革によって社会主義の具現化を志向したものであった。『獲得社会』を翻訳した山下は、コミュニティを基軸とし、人間とアソシエーションに強調点を置いた多元的国家論に基づく社会主義思想を指して<sup>56</sup>、「このような考え方が、1920 年代のイ

---

<sup>50</sup> *Ibid.*, p.2.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p.151.

<sup>52</sup> *Ditto.*

<sup>53</sup> Tawney, R. H., *The Radical Tradition*, p.170.

<sup>54</sup> *Ditto.* トーニーのマルクス主義への否定的な見解に関して、トーニーの *The Radical Tradition* を翻訳した浜林と鈴木は「訳者あとがき」において、「もちろんわたくしたちは、トーニーの思想に全面的に賛成しているわけではない。とくにかれの共産主義批判やプロレタリア独裁についての批判には、私たちは同調できないものを感じているし、あるいは労働者教育の問題についても、これをトーニーのように、成人教育と同じようなものとしてしまうことには賛成しがたい」と批判し、そうした主張については「批判的に読まれることを期待したい」と述べている。浜林正夫・鈴木 亮訳『急進主義の伝統』新評論、1967 年、340-1 頁。こうした批判的な見解には当時のわが国におけるマルクス主義のイデオロギーの影響力があつた。しかし、そうしたバイアスがなくなった今日では、わが国の成人教育や生涯教育においても、トーニーの貢献がより客観的に評価される思想的空間が出来上がっているといえる。

<sup>55</sup> Tawney, R. H., *Equality*, p. 85.

<sup>56</sup> トーニーもコミュニティ概念を多用していたが、コミュニティ論を基軸とした多元的国家論はトーニーと同時代にオックスフォード大学で学んだ R. M. マッキーバーによって確立された。MacIver, R. M., *Community, A Sociological Study: Being an Attempt to Set Out the*

ギリスで社会主義を主張した人の多くのものであり、それが、国家の絶対性を主張する全体主義的な社会主義である共産主義とイギリス社会主義を区別する一つの特徴となっている」と指摘しているが<sup>57</sup>、トーニーの理念的な社会主義思想はまたイギリス社会主義思想の特徴でもあった。

## 5. おわりに

これまでトーニーの成人教育運動の思想的背景としての社会主義思想を概観してきたが、そこには、キリスト教的倫理の社会化や共同教養の構築、ヒューマニズムの促進といった理念があった。トーニーは成人教育運動にこれらの理念を広めていくことを求め、それが資本主義の改良や社会的階級間の相違の解消を方向付けていく力となると考えていたといえる。

トーニーは 1912 年の初著『16 世紀の農業問題』(*The Agrarian Problem in the 16th Century*) の「序文」において、チュートリアル・クラスの受講生であった労働者に教えるうけたことに感謝の意を記し、チューターとしての仕事を「労働者仲間 (fellow-worker) としての特権」と表現している<sup>58</sup>。トーニーは WEA から退いた後の 1953 年の「WEA と成人教育」において、自身が最良の教育を受けたのは若き頃のチュートリアル・クラスの受講生であった労働者からの質疑であったと回想し<sup>59</sup>、「教育というものは、他にいろいろな効用はあるとしても、少なくとも部分的には、われわれが自らの孤立したパーソナリティの壁を乗り越え、過去の間人も含めてわれわれの仲間たち (fellow-men) と利益を共有する世界に加わる過程である」と述べている<sup>60</sup>。

トーニーの成人教育運動の実践には、労働者階級に対しての温情やあわれみなどではなく、対等に向き合う *fellowship* の精神があった。そして、そのような精神こそがトーニーがイギリス成人教育に果たした貢献の個性であった。

---

*Nature and Fundamental Laws of Social Life*, 3<sup>rd</sup> edn, Macmillan, London, 1924. なお、初版は 1918 年である。

<sup>57</sup> 山下重一「解題 トーニー 獲得社会」桑原武夫他、前掲書、406 頁。

<sup>58</sup> Tawney, R. H., *The Agrarian Problem in the 16<sup>th</sup> Century*, Longman, London, 1912, p. xxv.

<sup>59</sup> Tawney, R. H., *The Radical Tradition*, p. 82.

<sup>60</sup> *Ibid.*, pp. 83-4.

**香川 重遠 (かがわ・しげとう)**

1976 年、佐賀県生まれ。NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員。イギリス社会学・イギリス成人教育・大学開放論専攻。主要業績：「トインビー・ホールにおける『市民の教育』——イギリスにおけるシティズンシップ教育の源流」『生涯学習・社会教育ジャーナル』第 8 号、59-73 頁、2016 年；編著『よくわかる生涯学習 [改訂版]』ミネルヴァ書房、2016 年。NPO 法人全日本大学開放推進機構会員、福祉社会学会会員、日本イギリス理想主義学会会員、生涯学習・社会教育研究促進機構会員。